

十五年ぶりの

カナダ

平野敬一

が、やたらにセンチ
ンスを端折るぶつき
らばうなしやべり方
をするのが、ひどく
気になった。なにも
あのフロントの女の
子に限らなかった。

この素っ気なさは、
バンクーバーの空港
でも、公園でも、ド
ラッグ・ストアでも、

バンクーバーで最初に投宿したホテル
のフロントで記帳をしていると、係の若
い女の子がいきなり決めつけるような口
調で、"Cash or cheque?"と問いかけてき
た。もちろんホテル代の支払いは現金か
小切手かと事務的に聞いているだけなの
だが、ずいぶん乱暴な口の利き方をする
もんだな、と思わずその子の顔を見直し
たことだった。日本では、そもそもお客に
宿代の支払い方を予め聞くなどという失
礼なことをしないとと思うが、たとえ尋ね
ることがあっても「現金でお願いできま
すか?」という程度の口の利き方を、いま
どきの若い者でもすると思う。いくら不
作法者でも、お客に向かって「(あんた)現
金?それとも小切手?」とぶつきらばう
に聞いたりしないだろう(この見方、少
少甘すぎるか?)。日本語と英語の違い
や国による習慣の違いもあって、そう簡
単に比較できない点もあるが、英語にも
丁寧な口の利き方と乱暴な口の利き方の
区別は、ちゃんと存在しているのである。
十五年ぶりのカナダでは、若い人たちが

客扱いをする若い人たちの間に共通して
みられるものだった。そして、こちらの
年のせいもあるのだろうか、昔はこうで
なかった、もっと物柔らかな口の利き方
をしたはずだと、つい愚痴をこぼしたく
なるのである。私にいわせると、ことば
の素っ気なさは、やはり心の持ちようを
反映するものだ。ことばというものは、
決して人の心から独立して存在している
わけではないのだから。

十年一昔という。私のようにカナダを
訪れるのが十五年ぶりとなると「一昔半」
ということになるのかもしれない。これ
だけの歳月が流れると、どんな所でも多
少は変るのが当然で、昔のままのカナダ
を期待する方が甘いのもかもしれない。

バンクーバーに着いてから二、三日後、
旧知のジョージ・ウッドコック夫妻と一
夕歓談をする機会をえた。会うとききな
りウッドコック夫人は、私の心の中を見
透かしたように、今度久しぶりにカナダ
へ来てみて、人の心が変わったと感じま
せんか、と私に尋ねた。私は、その通り、

今度は何かなじめないような気がする、
と答え、いろいろ話合ったが、夫人の見
るところでは、一般にカナダ人(特に若
い人たち)は昔に比べると人のよさ、純
朴さを失ない、大体において素っ気なく、
無愛想(court)になってきたという。ず
っとこの町に住んでいて、人の心のそう
いう推移が、ひしひしと感じられる、と
夫人は述懐するのだった。夫人のこの観
察は、私の受けた印象が決して私一人の
偶然のものでないことを証明しているよ
うだった。

十何年前に、このときも久しぶりで(実
に四半世紀ぶり)、私が東京から空路バ
ンクーバーに着いたときは、たしかに今
より若かったせいもあるが、ほとんど着
いたその日からこの国にとけ込めるよう
な気がしたもののだが、今度は、そうはい
かなかった。ある違和感を覚えるのだっ
た。もう異なった環境に適應できない年
齢に私が達してしまっただのか。つまり、
こちらが変わってしまったのか、とも思っ
てみたが、ウッドコック夫人にいわせる
と、変わったのはカナダの方だという。ま
あ、公平に言えば、双方とも変わった、と
いうことなのだろう。

しかし、幸いに、バンクーバーで受け
た印象は、必ずしもカナダ全体に通用す
るものでないということが分かった。土
地により、人の心の表われ方が違うので
ある。早い話が、散歩の途中で方角が分
からなくなり、市街図を片手に、街角で
まごまごしていても、バンクーバーでは、
まず、だれも見向きもしてくれない。旅

人なんか、放っておけばいいんだ、とい
う空気だった。この素っ気なさがカナダ
人全般のものなら、これは住み難い国に
なったぞ、と私は自分にいきかせたこ
とだった。ところが、この素っ気なさは、
どうもバンクーバー特有(?)のものら
しいのである。東のトロントまで来ると、
もう様子が大変変わっているように感じら
れた。ここでは街角で地図にとらめっこ
をしていると、寄ってきて"Can I help
you?"と声をかけてくれる場合がときど
きあった。もちろん、これは私個人の経
験で、人により、まったく逆の経験をす
ることもありえよう。だから私は、バン
クーバーよりトロントの方が人間が親切
であると断定しようとは思わないが、ど
うもカナダの西と東とは、なにか微妙
な違いがあるように思われるのである。

この一か月余りで、私はカナダ最西端
の町ビクトリアから最東端の町セント・
ジョーンズまで、一応、足を延ばしたこ
とになるが、西から東へ移るにつれて、
人の心が暖かくなるような印象を受けた。
いま、私は、さながら「地の果て」のよ
うな感じすらするニューファンドランド
島で旅装を解いたところだが、ここでは、
街角で地図をひろげてまごまごしている
と、車をわざわざ止めて助け舟を出して
くれる人もいる。そういうとき、私はバ
ンクーバーで過ごした日々を思い出し、
「遙けくも来にけるかな」という感慨を
禁じえなくなるのである。この遙けさは、
もちろん、地理的距離のそれだけではな
い。